

苦味を好むこととパーソナリティの関係性:大学生調査^{1・2}

山本 雄大 ・ 齋藤 りこ

Abstract

A previous study (Sagioglou & Greitemeyer, 2016) found that individuals with a preference for bitter taste tend to exhibit antisocial personality traits such as daily sadism and psychopathy. The purpose of this study was to investigate potential links between bitter taste preferences and other personality traits. We focused on distress tolerance as a personality trait that may be associated with a preference for bitter taste. In the present study, one hundred and forty-nine university students reported their preferences for four different taste stimuli (sweet/bitter/sour/salty) and completed psychological scales measuring traits such as daily sadism, psychopathy and distress tolerance. In accord with the findings of previous study, correlation analysis revealed a significant positive relationship between a preference for bitter taste and daily sadism. Furthermore, a significant positive correlation was found between a preference for bitter taste and distress tolerance. These findings suggested that a preference for bitter taste is associated not only with antisocial traits but also positive traits, such as distress tolerance.

Keyword: taste preference, personality, daily sadism, distress tolerance

目的

食事を行うことは私たちの認知や判断などの様々な側面に心理的な変化を引き起こす。そして、その変化の方向性は摂取した物質の味によって大きく異なる。甘味を摂取することは自己報告に基づく協調性と援助意図を高める一方で(Meier, Moeller, Riemer-Peltz & Robinson, 2012)、苦味を摂取することは厳罰的な道徳判断(Eskine, Kacinik, & Prinz, 2011)、対人敵意や攻撃性を高める(Sagioglou

& Greitemeyer, 2014)。

心理的变化を引き起こすために、味覚刺激を大量に摂取する必要はない。味覚刺激を少量摂取しただけでも生じる。Meierら(2012)は、甘味刺激としてミルクチョコレートを用いたが、その量はわずかひとかけであった。苦味による心理的变化も少ない量の刺激で生じる。Sagioglou & Greitemeyer(2014)は、苦味刺激としてグレープフルーツジュースとリンドウ茶を用いたが、その量は20mlであった。ひとかけのチョコレートも20mlの飲み物も、それ

¹ 本研究は、第二著者が八戸学院大学健康医療学部人間健康学科に提出した2021年度研究演習レポートを、第二著者の許可のもと、第一著者がデータを再分析した上で改稿したものである。

² 八戸学院大学・八戸学院大学短期大学部の研究倫理委員会からの承認を受けて実施された(研究課題名:21-01 味の好みとパーソナリティの関連について)。

らは一口で摂取できてしまう量である。

少量の味覚刺激でも心理的变化を引き起こすのに十分であるなら、日常生活において特定の味覚刺激を好んで摂取する人は、その味を避けようとする人と比較して、味覚刺激と結びついた心理的变化をより多く体験することになるだろう。そして、心理的变化の体験頻度はその人自身の自己認知にも影響すると予測される。具体的には、甘い物が好きな人は甘い物を頻繁に口にすることで、協調性などの向社会的な高い状態が続き、いつしか自分自身のことを協調的な人物であると認識するようになるだろう。同様に、苦い物が好きな人は苦い物を頻繁に口にすることで対人敵意や攻撃性が高い状態が続き、自分のことをそうしたパーソナリティを持つ人物であると認識するようになるだろう。実証的研究もこうした予測を支持する。Meierら(2012)は、甘みを好む人が高い協調性を示すことを明らかにしている。これは苦味においても同様である。Sagioglou & Greitemeyer(2016)は、苦味を好むことと日常的サディズムやサイコパスといったパーソナリティが結びついていることを明らかにしている。本研究の第一の目的は、先行研究で見出された関連が日本人大学生についても認められるのかどうか追試することであった。そこで、本研究では、苦味を好む人ほど日常的サディズムやサイコパス傾向が高いという仮説を立て(=仮説1)、そうした相関が認められるかどうか検証を試みた。

苦味嗜好とパーソナリティの関連

苦味と結びつくパーソナリティは日常的サディズムやサイコパスだけなのであろうか。日常場面でも見られるサディスティックな傾向を概念化したものが日常的サディズムであるが(Buckels, Jones & Paulhus, 2013)、他者が苦しむ姿に快を覚える心理的性質は正常の範疇に収まるものであったとしても、向社会的であるとまでは言えないであろう。サイコ

パスに関してもその性質は向社会的なものとは言えない。反社会性パーソナリティ障害の構成要素となっていることから明らかな通り、社会的にはネガティブな性質を帯びる。

対人認知において、ネガティブな情報は優先的に処理される(Baumeister, Bratslavsky, Finkenauer & Kathleen, 2001)。こうした認知傾向はネガティビティ・バイアスと呼ばれ、ネガティブな出来事や情報を優先的に処理して回避行動を選択することが生存戦略的に有利であったことから人類進化の過程で獲得されてきたものと説明される(Baumeister et al., 2001)。ネガティビティ・バイアスに照らして考えれば、日常的サディズムやサイコパスといったネガティブな性質もまた対人認知の過程の中で優先的に処理される情報であろう。そして、日常的サディズムやサイコパスが苦味を好むという手がかりと結びついているのであれば、苦味を好む人たちが他者から接触を回避され、社会的に排斥を受けることになっても不思議ではない。しかしながら、彼らに対する排斥を指摘した実証的知見は報告されていない。

彼らが排斥の対象とならないのはなぜだろうか。そこにはいくつか理由があるだろうが、そのひとつは苦味を摂取できることが称賛や憧れの対象として肯定的に評価されていることだろう。Sakai(2020)も嫌悪刺激である苦味を摂取しようとする背景には他者からの称賛を得ようとする動機づけがあると指摘しているが、こうした動機づけは私たちが苦味の摂取を他者から称賛される行為であるとみなしているからこそ生じるものであろう。

苦味の摂取は称賛の対象となるだけでない。苦味を含んだ食べ物や飲み物の中には私たちの日常生活の維持に欠かすことができない物も多い。例えば、野菜の摂取がヘルシーな食生活の維持には欠かすことができないし、お茶やコーヒーも息抜きやリフレッシュのために欠かすことができない。それゆえ、私たちは成

長する中で苦味を受け入れる必要性を理解し、少しずつではあるが苦味に対する嫌悪を克服して摂取できるようになっていく。しかしながら、苦味は嫌悪刺激であるがゆえに、すべての人々が克服できるわけではない。大人になっても苦味を嫌いと感じる人々が多い。タキイ種苗株式会社(2022)は20歳以上の日本人600名を対象とした調査でも、特に嫌いな野菜がないと回答した人が33.2%と最も多かった一方で、26.2%の回答者が強い苦味を特徴とするゴーヤが嫌いと感じた。このように、社会には苦味を避け続ける人々もいる一方で、それを克服した人々もいる。そして、この両者の間には何かしらのパーソナリティの違いがあると予測される。とりわけ、後者の人々は苦味の嫌悪に耐えながら摂取を続けて苦味を克服したということであり、その背後には不快刺激に立ち向かい、それを乗り越えようとするパーソナリティの存在が仮定される。本研究では、こうしたパーソナリティを不快刺激耐性と呼び、「苦い物を好む人ほど不快刺激耐性が高いであろう」と仮説を立て(仮説2)、先行研究で示された反社会的なパーソナリティとの結びつきとは異なる関連が認められるのかどうか検証を行うこととした。

方法

参加者

2021年7月に、青森県内のH大学に通う大学生に対して調査参加への呼びかけを行い、自主的に参加の意思を示した149名に調査票を配布し、回答を求めた。参加者の性別分布は男性62名、女性83名、無回答4名であった。参加者の平均年齢は18.48歳であった。

調査票

甘味と苦味がある具体的な飲食物に対する各参加者の好みを測定するために、Sagioglou & Greitemeyer(2016)を参考に、10個の甘い食べ物と飲み物(飴・キャラメル・チョコレート・ケーキ・アイスクリーム・メープルシロップ・梨・レーズン・イチゴ・砂糖)、10個の苦い食べ物と飲み物(ビール・セロリ・コーヒー・カッテージチーズ・ジンジャーエール・グレープフルーツ・ラディッシュ・ライ麦パン・紅茶・トニックウォーター)をどれくらい好きか7件法で尋ねた(0:口にすることがないから分からない、1:とても嫌い~6:とても好き)。内的整合性を示すクロンバックのアルファ係数を計算したところ、10個の甘い食べ物と飲み物に対する選好(具体的甘味選好)は $\alpha=.766$ とな

表1. 基本四味に関する一般的選好尺度

-
- ・甘い食べ物はどれくらい好きですか？
 - ・甘い飲み物はどれくらい好きですか？
 - ・酸っぱい食べ物はどれくらい好きですか？
 - ・酸っぱい飲み物はどれくらい好きですか？
 - ・苦い食べ物はどれくらい好きですか？
 - ・苦い飲み物はどれくらい好きですか？
 - ・塩辛い食べ物はどれくらい好きですか？
-

表 2. サイコパス・日常的サディズム・不快刺激耐性の質問項目

サイコパス
<ul style="list-style-type: none"> ・良心のせめぎあいというものをあまり感じたことがない ・どちらかと言えば冷淡で思いやりに欠ける ・道徳性との結びつきが希薄で、自分の行為が道徳的かについて気にしないほうである ・どちらかと言えば皮肉を言うほうである
日常的サディズム
<ul style="list-style-type: none"> ・TV ゲームの中で、私はリアルな血しぶきが出るものが好きだ ・私は YouTube で人々が戦っている映像を見るのが好きだ ・逃げ場のない檻の中で行われる格闘技を見るのが好きだ ・猟奇的な映画のお気に入りのシーンを繰り返し見ることがある ・スポーツにはあまりに暴力的過ぎる競技が多いと感じる ・ゲーム内で悪役となり他のキャラクターを苦しめることが楽しい ・カーレースの中で、一番楽しいのはクラッシュの場面である
不快刺激耐性
<ul style="list-style-type: none"> ・私は嫌なことがあっても逃げ出さないほうだ ・私は不快なことにも立ち向かって解決しようと試みるほうだ ・私は困難に直面してもどうにか乗り越えようと努力するほうだ ・どちらかと言えば、私は嫌なことがあると逃げ出してしまいがちだ ・不快に耐えられる精神的な強さを備えているほうだ

った。10 個の苦い食べ物と飲み物に対する選好(具体的苦味選好)に関する内的整合性は $\alpha = .815$ となった。そこで、10 個の甘い飲食物と苦い飲食物に対する好みへの回答のうち、口にすることがないと回答したものを除いた上で評定値を平均して、具体的甘味選好と具体的苦味選好の指標とした。さらに、Sagioglou & Greitemeyer(2016)を参考に、それぞれの味のついた食べ物と飲み物について、それらが全体的に見てどれくらい好きなのか、1(とても嫌い)から 6(とても好き)の 6 件法で回答を求めた。そして、食べ物に対する評定と飲み物に対する評定の平均を算出して、その味の一般的選好の指標とした(表 1 を参照)。なお、塩味に関しては塩辛い飲み物が存在しないので塩辛い食べ物の好みだけを測定し、得られた値を指標とした。

サイコパス傾向や日常的サディズムの測定

についても、Sagioglou & Greitemeyer(2016)で使用された尺度を採用し、それらを日本語訳して利用した。サイコパスに関しては、Jonason & Webster(2010)が開発したダークトライアド尺度を使用した。ダークトライアドとはナルシズム、サイコパス、マキャベリアニズムの 3 つの心理特性から構成される概念であり、本研究ではその中のサイコパスを測定する 4 項目を日本語訳して尋ねた(表 2)。参加者にはそれぞれの項目について 1(全く当てはまらない)から 9(とても当てはまる)の 9 件法で回答を求めた。厳密なバックトランスレーションは実施しなかったが、内的整合性を表すクロンバックのアルファ係数は $\alpha = .755$ と十分に高かったことから、信頼性が保たれているとみなし、それぞれの項目に対する評定値の平均を算出してサイコパスの指標とした。日常的なサディズム傾向の測定に

表 3. 味の好みとパーソナリティ尺度の相関係数

	不快刺激耐性	日常的サディズム	サイコパス
具体的甘味選好	.125	-.077	-.010
具体的苦味選好	.356 **	.014	.023
一般的甘味選好	-.027	-.047	-.038
一般的酸味選好	.146	.131	.086
一般的苦味選好	.183 *	.169 *	.129
一般的塩味選好	-.044	.166 *	.099

ついては、Buckels & Paulhus(2013)が開発した CAST の 7 項目を日本語訳して測定を行った(表 2)。回答は 1(全く当てはまらない)から 5(とても当てはまる)の 5 件法で求めた。日常的サディズムについてもバックトランスレーションは実施しなかったが、内的整合性を表すクロンバックのアルファ係数が $\alpha = .757$ と高かったことから、十分な信頼性があるとみなし、評定値を平均したものを日常的サディズムの指標として採用した。最後に、不快刺激に立ち向かい乗り越えようとする不快刺激耐性を評価するため、「私は嫌なことがあっても逃げ出さないほうだ」など、5 項目のオリジナル尺度を作成した(表 2)。こちらに関しても、1(全く当てはまらない)から 5(とても当てはまる)の 5 件法で回答を求めた。内的整合性をアルファ係数が $\alpha = .858$ と十分に高かったことから、逆転項目を処理した上で、評定値の平均を算出して不快刺激耐性の指標とした。

結果

味に対する好みと日常的サディズム、サイコパス、不快刺激耐性の 3 尺度との関連を検討するために相関分析を行った。分析結果を表 3 に示す。10 個の具体的な苦い飲食物に対する選好と不快刺激耐性の間に有意な正の相

関($r = .336, p < .01$)が見られた。苦い飲食物全体に対する一般的選好に関しては、日常的サディズムとの間に有意な正の相関($r = .169, p < .05$)、不快刺激耐性との間に有意な正の相関($r = .183, p < .05$)が認められた。仮説とは関係ないが、塩味の食べ物を好む傾向と日常的サディズムの間にも有意な正の相関が認められた($r = .166, p < .05$)。

考察

これまでの研究では、苦味への好みと日常的サディズムやサイコパスといった好ましくないパーソナリティに結びつきが見出されてきた。本研究においては 10 個の具体的な苦い飲食物に対する好悪と日常的サディズムの間には有意な関連は見られなかったが、苦い飲食物全体への選好を尋ねた一般的苦味選好の尺度得点は日常的サディズムと有意な正の相関を示した。この結果は苦味を好む傾向が高いほど日常的サディズム傾向が強いことを意味しており、本研究の仮説 1 を支持するものであり、なおかつ、両者の関連を明らかにした先行研究(Sagioglou & Greitemeyer, 2016)の知見も支持するものであった。さらに、本研究は大学生に限定されていたものの、日本に居住する者を対象に実施された。それでもなお、

先行研究の知見に合致して、苦味を好むことと日常的サディズムの関連が見出された。このことから、こうした結びつきが文化を超えて存在しているものであることが示唆された。

本研究では、苦味を好むこととパーソナリティの新たな関連についても検討を試みた。具体的には、苦味の克服には苦味に対する嫌悪に負けず摂取を続けることが必要であることから、「苦味を好む人々は不快刺激耐性が高いであろう」と仮説を立て、そうした関連が認められるのかどうか検証した。調査の結果、10個の具体的な苦い飲食物に対する選好、苦い飲食物全体に対する選好ともに、不快刺激耐性との間に有意な正の相関を示した。これは本研究の仮説を支持するものであった。苦味は人間にとって生得的な嫌悪刺激であり、自分の身を守るためにも避けるべきものである。そうであるにも関わらず、苦味に対する嫌悪を克服するだけでなく、それを超えて好んで摂取するようになる人々が多い。そして、今回の研究から、苦味を好む人々は苦味以外の不快刺激全般に対しても立ち向かい乗り越えようとする傾向があることが示唆された。

日常的サディズムは攻撃性と高い関連があり(Buckels et al., 2013)、苦味の摂取が攻撃性や対人敵意を高める効果がある(Sagioglou & Greitemeyer, 2014)。これらのことから、サディズムと苦味を好むことの結びつきは、苦味を好む人が苦味を摂取することで生じた攻撃的な心理的な変化を反復的に知覚した結果として獲得されたものである可能性が高い。一方で、本研究で見出された不快刺激耐性との関連は苦味を摂取した結果として獲得されたものではないだろう。むしろ、不快刺激耐性がなければ苦味という嫌悪刺激を克服しにくいことから、不快刺激耐性というパーソナリティは味覚刺激の摂取を促した原因として機能していると考えられる。ただし、本研究は相関研究であり、その因果関係を特定することができない。それゆえ、想像の範疇を超えるもの

ではないが、本研究の結果は味覚刺激に対する好みとパーソナリティとの結びつき方は多様であり、味覚刺激を摂取することで生じる結果として結びつくパーソナリティもあれば、味覚刺激の摂取を促す原因として結びつくパーソナリティもあることを示唆するものであったと言えるであろう。

前述の通り、本研究の結果から、苦味を好む傾向と日常的サディズムの関連が文化を超えて見られるものである可能性が示唆された。その一方で、今回の研究は日本国内に居住する大学生を対象としたものであったことから、示唆された関連が日本人全体の傾向と一致するものであるかは定かではない。苦味を好む傾向と不快刺激耐性との関連についても同様である。本研究で見出された関連が日本社会に一般化できるかどうかは定かではないし、ましてや、文化を超えて見られるかについては不明である。この点については研究対象を広げた上での更なる検証が必要であろう。

引用文献

- Baumeister, R. F., Bratslavsky, E., Finkenauer, C., Vohs, K. D. (2001). Bad is stronger than good. *Review of general psychology*, 5, 323-370.
- Buckels, E. E., Jones, D. N., & Paulhus, D. L. (2013). Behavioral confirmation of everyday sadism. *Psychological Science*, 24, 2201-2209.
- Buckels, E. E., & Paulhus, D. L. (2013). Comprehensive assessment of sadistic tendencies (CAST). Unpublished measure. University of British Columbia.
- Eskine, K. J., Kaciniak, N. A., & Prinz, J. J. (2011). A bad taste in the mouth gustatory disgust influences moral

- judgment. *Psychological Science*, 22, 295-299.
- Jonason, P. K., & Webster, G. (2010). The Dirty Dozen: A concise measure of the dark triad. *Psychological Assessment*, 22, 420-432.
- Meier, B. P., Moeller, S. K., Riemer-Peltz, M., & Robinson, M. D. (2012). Sweet taste preferences and experiences predict prosocial inferences, personalities, and behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology*, 10, 163-174.
- Sagioglou, C., & Greitemeyer, T. (2014). Bitter taste causes hostility. *Personality and social psychology bulletin*, 40, 1589-1597.
- Sagioglou, C., & Greitemeyer, T. (2016). Individual differences in bitter taste preferences are associated with antisocial personality traits. *Appetite*, 96, 299-308
- Sakai, N. (2020). Top-down processing in food perception: Beyond the multisensory processing. *Acoustical Science and Technology*, 41, 182-186.
- タキイ種苗株式会社. (2022). 2022年度 野菜と家庭菜園に関する調査. https://www.takii.co.jp/info/news_220824.html

執筆者情報

- 山本 雄大(Takehiro YAMAMOTO) 八戸学院大学健康医療学部人間健康学科 准教授
- 齋藤 りこ(Riko SAITOH) 八戸学院大学健康医療学部人間健康学科 学生 (現在: 秋田県北秋田市立阿仁合小学校 勤務)